



第5祖 善導大師の生涯と教え

令和5年7月16日(日)
第31回 信行寺仏教講座

「正信偈」の構成

- | | | |
|-----|---|------------|
| 依経段 | 1 | 親鸞聖人の信の表明 |
| | 2 | 阿弥陀仏の願いと救い |
| | 3 | 釈尊の教え |
| 依釈段 | 4 | 教えの伝承 |
| | 5 | 七高僧の教え |
| | 6 | 親鸞聖人のおすすめ |

七高僧の教え

七高僧とは…

親鸞聖人が
特に敬重された
7人の高僧方



七高僧は、**本願**の教えを
親鸞聖人まで届けてくださった。
そして、多くの人を経て
いま、私のもとまで届いている。

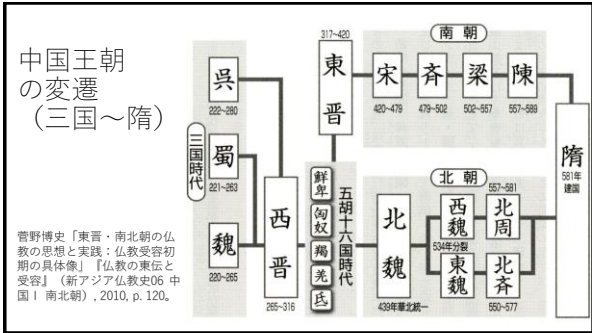


「あなたを
必ず我が国に
生まれさせる。
まかせよ」

本願

設我得仏
十方衆生
至心信樂
欲生我國
乃至十念
若不生者
不取正覺
唯除五逆
誹謗正法

「第十八願」 (至心信樂の願)



完成と盛大 (隋・唐)

【隋 (581～618)】

◇文帝 [在位581～604] の仏教復興政策

- 仏教復興を推し進め、仏教を精神的支柱とする新しい統一国家の完成を目指した。
- 国立寺院や舍利塔を建立した。
※文帝後の煬帝の時に隋が滅亡

◇学派の形成と仏教者の活躍

- 天台宗や三論宗という大きな2つの学派が成立した。
- この時代に活躍した浄影寺慧遠 (じょうようじえおん) [523～592] (地論宗)・智顛 (ちぎん) [538～598] (天台宗)・吉蔵 (きちざう) [549～623] (三論宗)の3者は中国仏教思想史上重要な人物であり、「隋の三大法師」と呼ばれる。

◇末法意識の普及《北齊～唐》

○末法

正法 (釈尊入滅後500年間)、像法 (その後1000年間)、末法 (その後10000年間) という仏教の時代区分の一つである (年数には諸説ある)。「末法」とは、教えのみが残り、それに適う修行もさとりを開くこともない仏教衰退の時代をいう。

◎国家の仏教政策の結果、仏教の学問的研究や民衆教化が盛んとなった。

末法思想

	時期	教 (教え)	行 (修行)	証 (さとり)
正法	釈尊入滅後500年	○	○	○
像法	その後1000年	○	○	×
末法	その後10000年	○	×	×
法滅	その後	×	×	×

◎隋代は釈尊入滅から1500年が経過していると考えられていた。

【唐 (618~907)】

◇則天武后 [在位684~705] の仏教保護



中国史上唯一の女帝。仏教を重んじ、諸寺の造営、寄進を盛んに行った。また自らを弥勒菩薩の生まれ変わりと呼び、このことを記したとする『大雲経』を創り、これを納める「大雲経寺」を全国の各州に造らせた。

国家による保護・優遇により、各学派が独自の思想や立場を構築して、繁栄を見せた唐の仏教は、中国仏教史における最盛期を迎えた。

【隋・唐の中国】

百橋明穂・中野徹編集『世界美術大全集』(東洋編4、隋・唐・小字版、一九九七年、四二五〜四二六頁)。

オレンジ線
ミドリ線
……隋(六二二年頃)の領土
……唐(六六九年頃)の領土

唐の都・長安 (現在の西安)

◇玄奘三蔵 [602~664] のインド求法の旅からの帰国と翻訳事業

- 唯識思想を学ぶためにインドへと旅立ち、インドのナーランダ僧院での修学の後、帰国し、多くの仏典を將來した。(627年出国~645年帰国)
※善導大師が32歳の時に帰国
- 国家主導のもと、翻訳チームを組織し、膨大な量の仏典を漢訳した。(76部1347巻)

大慈恩寺

隋の皇帝、高宗が亡き母の菩提のために648年に長安(現在の西安)に建立。その名は「慈母の恩」に由来する。

境内にそびえる七層の大雁塔は、玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典や仏像などを保存するために、高宗に申し出て建立した塔。善導大師も晩年、ここに住むことが許されたといわれる。(世界遺産)

玄奘三蔵と『西遊記』

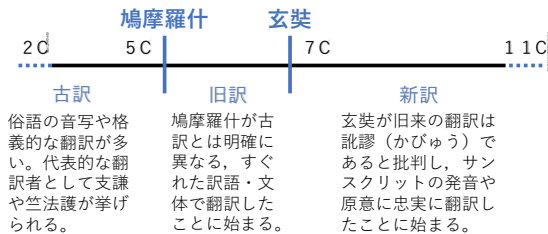
玄奘がインド・西域の旅を記録した『大唐西域記』は、当時の仏教事情や仏跡のみならず、各地の地理や風俗などを知ることができる貴重な資料である。

なお、日本でもお馴染みの『西遊記』は、この『大唐西域記』がモデルとなっている。玄奘三蔵が孫悟空・猪八戒・沙悟浄のお供を連れて、お経を求め、白馬に乗って天竺（インド）を目指す小説。『西遊記』には、さまざまな仏・菩薩・妖怪の伝奇物語がふんだんに盛り込まれている。

仏典の翻訳

中国の仏典翻訳は、2世紀中頃から11世紀までの約900年にも及ぶ、長い歴史がある。この長い歴史の中で、偉大な翻訳者が2人いる。それは**5世紀の鳩摩羅什**と**7世紀の玄奘**である。一般にこの2人を基準として次のような仏典翻訳史が区分される。

中国仏教の翻訳史



善導大師の生涯 [613~681]

善導大師（第5祖）は、隋の末、臨淄（現・山東省）あるいは泗水（現・安徽省）に生まれたとされる。二十歳前後に中国各地を遍歴するなか、玄中寺で道綽と出会い、浄土教を学ぶ。その後、終南山の悟真寺、長安の光明寺や實際寺などに住み、念仏の実践や民衆教化に努め、69歳のとき、實際寺において死去する。

善導大師（613-681） 69年の生涯 中国・隋・唐代

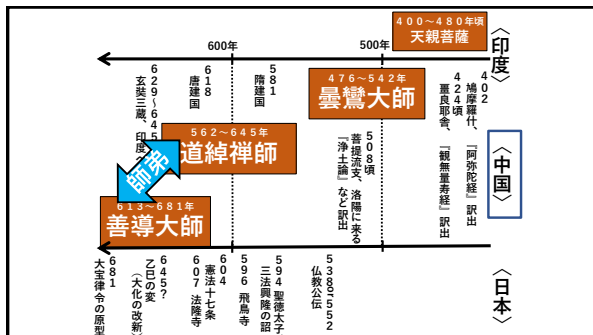


・幼くして出家。各地を遍歴し、様々な仏典の教えを学ぶ。

※仏教が盛んに研究される
※訳経僧・玄奘三蔵が活躍
『大唐西域記』 → 西遊記

・29歳頃、道綽禅師の門に入り、『観経』を学ぶ

※道綽禅師80歳頃（51歳差）



- ・長安に帰り、終南山や光明寺で念仏の実践や民衆教化に努める
 - ・晩年、龍門石窟で大仏造立の検校（監督役）を務める。
- ・浄土変相図
300幅
- ・阿彌陀經書写
10万巻

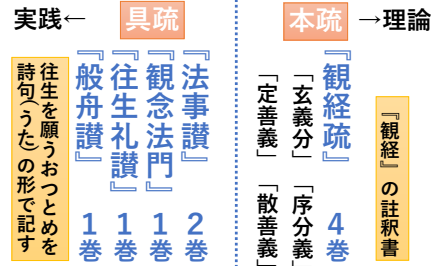


善導大師の著作

主著は『観経四帖疏』（一般的に『観経疏』と略称）。「玄義分」、「序分義」、「定善義」、「散善義」の計4巻で構成されている。『観経疏』はこれまでの『観無量寿経』解釈の誤りを正すという趣旨のもと著された書物である。この『観経疏』は法然聖人〔1133～1212〕に多大な影響を与え、称名ひとつによる救いを示す大きな流れを作っていた。

この他に、『法事讃』（全2巻）、『観念法門』（全1巻）、『往生礼讃』（全1巻）、『般舟讃』（全1巻）を著した。なお、これら著作は総称して「五部九巻」とも呼ばれる。

善導大師の五部九巻



『観経』が注目され、中国の著名な学僧(諸師)たちが様々に解釈していた

当時の諸師の中で**ただ独り**、釈尊が『観経』をお説きになった**真意を明らかにされた。**



こ こん かいじょう
古今楷定

善導独明仏正意

某、いまこの『観経』の要義を出して、古今を楷定せんと欲す。(散善義)

「古今」とは、善導大師の当時やそれ以前の聖道門の諸師のことで、特に浄影寺慧遠・嘉祥寺古藏・天台大師智顛や撰論宗の学徒などを指す。「楷定」とは、**手本・基準を確定するという意**。善導大師が、古今の諸師の『観経』に対する見解の誤りをあらためて、規範とすべき正しい解釈を確定したことをいう。またその功績を指す。

観経

悪人であっても、念仏すれば浄土に往生できる。

諸師1: 凡夫でさえ行けるのだから、程度が低い浄土なのだろう。

諸師2: すぐには往生できない。遠い未来の話だろう。



善人も悪人も念仏すれば、命を終えると**すみやかに勝れた浄土に往生できる**

善導大師